立命館地理学　第33号（2021）1-3

紙　碑

鈴木富志郎先生のご逝去を悼む

藤　巻　正　己*

2021年1月21日、鈴木富志郎先生がご逝去された。享年88歳であった。私どもが訃報に接したのは同年4月に入ってからのことである。その突然の訃報に、地理学教室一同、驚きを禁じ得なかった。コロナ禍にあってご家族のみでご葬儀を執り行われたとの由、とはいえ、鈴木先生に対して今なおご霊前にてご挨拶できないでいることは、心苦しいかぎりである。

ご遺族によれば、晩年、鈴木先生は入院生活をされつつも、看護師の方々には笑顔とユーモアを絶やされることなく接せられ、しかも安らかに永眠されたという。先生のご逝去は、私どもにとって悔やまれてならないが、いかにも鈴木先生のお人柄にふさわしい旅立ちをなされたとの情景に思いを馳せながら、衷心より先生のご冥福をお祈りする次第である。

鈴木先生は1932年、東京でお生まれになった。1955年成蹊大学政治経済学部をご卒業後、渡米され、1962年にワシントン大学大学院地理学研究科にて博士課程単位取得退学、同年、成蹊学園教諭兼成蹊大学講師に就任された。そして、1972年に立命館大学文学部助教授として着任、1975年には教授に昇任された。以降、1998年に定年退職を迎えられ名誉教授の称号を授与され

＊立命館大学文学部・特任教授

るまで教育・研究に尽力されるとともに、激職の学生部長や学園の評議員など、数々の要職を務められた。立命館大学を去られてからは、2003年までの5年間、愛知大学文学部特任教授としても在職された。その後、教育の一線から離れられてからは、神奈川県茅ヶ崎市にてご子息のご家族とともに悠々自適の生活に入られた。

鈴木先生が教育・研究において注力されたのは、主に日本の都市化・大都市圏に関する分野においてである。また、英語圏地理学において台頭しつつあった計量地理学の方法論をいち早く日本の地理学界に紹介された（『計量地理学序論』、地人書房、1975年）。

先生のご著作はいずれも、難解な概念や用語の使用をできるかぎり避け、簡潔明瞭な文体でなおかつ的を射たものであった。『日本の都市化』（木内信蔵ほか編、古今書院、1964年）、『現代日本の都市化』（青木栄一ほか編、古今書院、1979年）所収の論稿は、私ども多くの都市地理学徒が広く参照・引用させていただいご労作であった。また、「マンション考」（立命館文学386-390、1977年）、「学生の住居形態とその分布・移動について―京都市左京区を例として―」（立命館文学439-441、1982年）、「京都の『下町』―地域のひろがりと知覚―」（京都地域研究1、1986年）、「ゴルフ場の立地と変化に関する研究ノート」（立命館文学527、1993年）などでみせられた、その時々の社会事象を帰納的アプローチによって解き明かし、洗練された筆致で記述していくという手法は実に見事であった。先生のこうした研究姿勢は教育の場面でもよく表れ、先生のご着任によって歴史地理学や農業地理学、村落地理学研究を伝統としてきた立命館地理学に新たな刺激が与えられるとともに、先生のお人柄もあって、都市地理学をテーマとして卒業論文を提出する学生を数多く輩出されたことを特記しておきたい。

鈴木先生は学界活動においても広く貢献された。日本地理学会では委員や幹事を担われ、人文地理学会では集会理事（1976年11月～78年10月）と編集理事（1982年11月～84年10月）を務められた。不肖私も、先生を長とするそれらの委員会の末席に身を置く機会を与えていただいた。編集委員会では、投稿論文の評価をめぐって熱気を帯びる場面もあったが、先生はその熱気を一気に冷やすことなく、曖昧に丸めることもなく、結果として適切な落としどころを示してくださるなど、その手腕を大いに発揮された。鈴木先生がご存命中に、思い出話をしている際に、私がそのことを申し述べると、穏やかな笑顔で「そんなこともあったね」と返事をされたことを今なお記憶にとどめている。また、鈴木先生は、日本都市学会の常務理事ならびに近畿都市学会の会長・常任理事としても、日本の都市研究の発展に寄与された。全国各地で開催された日本都市学会の大会に、先生のお声がけで私も参加させていただいた。その旅先でのお酒を交わしながらの語らいは、懐かしい限りである。

宿をともにさせていただいた機会はほかにもある。かつて地理学教室では夏季休暇中に、教員指導のもと院生と学部生とが一団となって全国各地で巡検調査を行う恒例行事があったが、私も先生が引率された伊豆大島コースに参加させていただいた。また、先生が研究代表者を担われた広島県尾道市での科研調査にもメンバーとして加えていただいた。その成果は、「地理学教室特集：尾道市の機能と構造」（立命館文学391-393、1978年）としてまとめられている。

鈴木先生に私が初めてお会いしたのは、先生が立命館大学に来られた早々の頃であった。当時、

地理学教室は広小路学舎の2階を中心に専攻の諸施設を有していたが、学部3回生の私は、友人から、外国の地理学雑誌が収納されている部屋に新任の鈴木先生がおられることを耳にし、「どんな方だろう」という好奇心にまかせ、その部屋に出向いたところ、先生は窓際で脚をくまれながら雑誌を読んでおられた。私の記憶ではただそれだけの情景でしかないが、先生は40歳の、助教授として東京から着任されたばかりの都市地理学研究では気鋭の方であり、卒業論文のテーマを都市地理学に関わるものと決していた私にとって、その時の先生の姿は眩く映ったものである。

図らずも不肖私が、鈴木先生の後任として天理大学から移籍し、衣笠・尽心館2階の先生の研究室を引き継がせていただくこととなった。先生が衣笠を去られたあと、学会などでときおりお会いする機会はあったがいずれも立ち話でしかなく、最後に親しく言葉を交わさせていただくことができたのは、2014年12月に開催された同窓会の懇親会においてであった。以前と変わらない穏やかな語り口で、茅ヶ崎のご子息のご家族とともに静かな生活を楽しんでおられることなど近況を述べられていたが、このたびの突然の悲報に接し、ご生前中、先生ともっとお話ができなかったことを悔やむばかりである。最後にあらためて、鈴木先生のご冥福をお祈りしたい。